
ハヤテのごとく！～BAD ENDまっしぐら!?プロフェッショナル・ナギの流儀～

dandy

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハヤテのごとく！ ～BAD ENDまっしぐら！？プロフェッショナル・ナギの流儀～

【Nコード】

N0311M

【作者名】

dandy

【あらすじ】

若干13歳にして規格外のお譲さま、三千院ナギは日々の生活に飽き飽きしていた。そんな時、執事である綾崎ハヤテに無理難題を吹っ掛ける。ハヤテは主の期待に応えることができるのか？そしてその先にあるものとは……

1章 傍若無人なお譲さま（前書き）

ばばーん！皆々様、ワンクリックありがとうございます。NOW
RODING……

冗談はさておき、今回また「ハヤテのごとく！」で小説を書いてみました。自分としては別作品でもうやりきった、出しきった感があり、言わば完全燃焼の後にこうして書けたことにちよつとびっくりです。自分で自分にびっくりなんて変ですよ

2010W杯、日本が勝ったことくらいびっくりしてます。たまたまとはいえまさかゴールを奪うとは

んなことはいいんです。して今回の小説はっ！とてつもなくコンパクトにまとめました。今までのようにだらだと字数を稼ぐだけのものじゃありません。しっかり一文一句意味を持たせようと頑張りました。けど無理でした。最初から白旗降伏状態です。煮るなり焼くなり好きにして。こちらMなんだよ。嫌よ嫌よも好きのうち。かかってきなさい

もうこれMじゃないな。変態ですね。これ以上の発言は墓穴を掘りかねないので慎みましょう。それでは……始まり始まり~~~~♪♪♪

1章 傍若無人なお譲さま

執事、それは仕える者。 執事、それはかしく者。

執事、それは主の生活全てをサポートするフォーマルな守護者……。

そして今日も完璧な執事を目指すべく主の期待に応え励む少年執事……綾崎ハヤテが行く。

容姿、幸薄気。性格、極めて悲観的。不幸が骨の髄まで染み込んでしまった可哀想な彼は親の借金1億5千万円を無利子無担保で貸してくれた三千院家次期当主ナギの恩に報いるべく、そして借金を1日も早く返済するべく常にナギの側で彼女を悪の手から守っている。

今朝も彼女にはびこる悪としのぎを削り戦っていた。

「お譲さま。朝ですよ。起きてください」

ハヤテはいつものように機械的と言っていいくらいの正確な時間にナギの寝室を訪れては扉の前でこう言っている。だがこれを平日毎日欠かさず続けていても一向に効果がない。

しばらくしてようやく返答が聞こえてきた。

「昨日は夜中まで忙しかったのだ！寝かせろ！」

そう。ハヤテが今戦っていたのはナギを巣くう睡魔。夜中まで忙しい理由は十中八九ゲーム及びその類いであろう。

「いけませんよ。もっと早く寝ないと。夜中の3時まで起きていたら眠いのは当然です。最低でも8時間は睡眠に当てなければ……」

「おい！なぜ私が3時まで起きてたのを知っているのだ！」

「なぜって……勉強の休憩がてらお譲さまの部屋の前を通ったら中からゲームの音が聞こえたので」

「ということはお前……寝たのは何時なのだ？」

「4時です」

ナギは絶句した。ハヤテは5時過ぎには起きているのだから1時間程しか寝ていない。だが平素ハヤテはこのような生活サイクルなので問題はない。よい子は真似しないように。

ハヤテの超人ぶりを改めて認識したナギだが起きるつもりはない。誰が早起きしようが夜なべをしようが自分の身には一切関係ないからだ。

「とにかく寝かせろ！あと10時間は寝るぞ！」

「ダメですよ。10時間も寝ていては学校はとっくに終わっています。だいたい昨日も同じ理由で欠席したじゃないですか」

ハヤテはひたすら食い下がる。扉越しに説得を続けること約10分。ついに屈したナギは寝巻きのままハヤテの前に現れた。

何も言わずただただ目をごしごしとこする。それでもハヤテは笑顔で対応した。

「おはようございます。お譲さま」

「……」

「今日はいつになくいい天気ですから気持ちも冴えると思いますよ。部屋にばかりこもっていないでたまには外に出て体を動かしませんか？もちろん学校の後にも」

「……」

「朝食はもう用意してありますし、お弁当も作っただですよ。顔を洗ってご飯を食べれば眠気も……」

ナギが起きたことだけにとらわれ、やや興奮気味に話し続けたがナギの様子を見て口が止まった。起きたと思ったナギは立ちながら鼻ちようちんを作って寝てしまっている。ハヤテはすぐにナギの体を揺すった。

「起きてください！お譲さまが器用なのはわかりましたから！早くしないと本当に遅刻ですから！」

「見えない聞こえない……見えない聞こえない……」

「それは目をつぶっているからです！夢から覚めてください！お譲さまあ」

どんなに言ってもナギは目を覚まさない。たまに目が開いたかと思えば白目を向いてしまう。

結局寝たままのナギを無理矢理学校に連れていくことに。半強制的に屋敷から連れ出そうと引っ張っているとハヤテと同じく屋敷の使用人・マリア（17歳、ピチピチのメイドさん）が玄関で二人を待っていた。

「その様子だとナギは寝ているみたいですね。ハヤテ君には苦劳かけます」

「いえ。これも執事の務めです。お譲さまを正しい方向に導けなければ一流にはなれませんから」

「別に無理して一流にならなくてもいいんですよ？理想を求めて高い壁の前で立ち止まるより小さな成功でほんの少しだけ進むほうが自信もつきますし現実的ですからね」

「大丈夫です。無理はしてません。ただ……」

「ただ？」

「不安にはなりますよね……。もしこのままお譲さまが大人になっても引きこもりのままだったら……」

「ああ……。そちらの心配を？一流になれるか心配してるんじゃない？」

「お譲さまが真人間になれば僕も一流ということになりますから。一流は一流を知り超一流は超一流を育てるとも言いますし」

「そうですか……」

（一体誰がそんなことを言ったのかしら……？）

マリアはハヤテの言葉の出所が気になった。時間を気にするとハヤテはナギの手を引き屋敷を出る。まだナギは起きない。

白皇学院についた2人。ハヤテはいつものように受ける授業はすべて真面目に受けている。成績ギリギリでさらに途中編入という立場からして寝ていたり休んだりする余裕などないのだ。そう、後ろの席で机に突っ伏して寝ているナギのように。

だが、さすがに寝てばかりでは来た意味がない。そう思ったハヤテは授業中ではあったが後ろを向き小さな声でナギにささやく。回りには聞こえないくらいの小さな声で。

「お譲さま。これでは屋敷にいるのと同じじゃないですか」

「……」

「ここまで来たならちゃんと勉強を……」

ナギをなんとかして起こそうとしたが時間がきた。時間というのは回りに気付かれてしまったという意味である。教卓で世界史を教えている担任の桂雪路の右手から赤いチョークがハヤテめがけて一直線に放たれた。

「私語厳禁！」

「す、すみません先生。ですがいきなりチョークを投げないでください。死人が出たらどうするんですか」

「綾崎くんだから平気かなーって」

「やめてくださいよ。……まあ平気ですけど」

ハヤテは眉間めがけて飛んできたチョークを左手の人差し指と親指でつかんでみせた。チョークは螺旋状に回転していて白い煙がモワモワとなびいている。ハヤテは席から立つと雪路にチョークを返した。

「はい。先生」

「悪いわね。でも授業中によそ見しておしゃべりするなんて感心しないわ」

「そのことは謝ります」

すぐに頭を下げる。席に戻ったハヤテはちらつと後ろを見た。今の雪路とのやり取りで少しばかり教室がざわめいたのだがナギはピクリとも動かない。

その後授業の終わりのチャイムが鳴るとようやくムクツとナギは頭を上げた。チャイムの音にまぎれてハヤテの背中をシャーペンでつついた。

「ハヤテー。紅茶ー」

「今は学校ですよ。お譲さま」

「ん？そうだったのか。なら帰ろう。チャイムも鳴っているし」

「何言ってるんですか……。これは一時間目の終わりのチャイムです。これからですよ、これから」

「嫌だ。帰る」

ようやく起きたと思えばものすごく不機嫌。寝起きが悪い。この時間広げたが何も書かなかったノートをカバンにしまうとまたまた机に伏してしまった。

「むにゃむにゃ……」

「ちよっとお譲さま!？また寝るんですか!？起きてくださいってば!」

「帰るというなら起きても構わん」

「帰りませんよ。……そうだ!それなら……」

思い出したかのようにハヤテはポケットに手を入れガムを取り出した。眠気覚ましのつもりだろう。

「これを食べて目を覚ましてください」

「食べるのも辛い。よくわからんが……全身の力が抜けるようなのだ……」

普段のだらけた生活の作用なのかまったく体に力が入らない。ころうじて目と口だけ動く。だが何か違和感を感じていた。

(なんなのだ……?いくら学校が嫌でもこんなに体が拒絶するなんて……)

もしや自分の学校嫌いが自分自身に金縛りをかけているのか、とまで考えてしまうくらい動けない。嫌な汗が出てきた。どうやらハヤテもナギが動きたくないのではなく自分の意思では動けないのでは?と感じたようだ。

「お譲さま?もしかして体が……」

「どうしたことか言うことを聞かんのだ……」

助けを求めるかのようにか弱い声を出すナギ。ハヤテがなんとかしてくれる—そういう思いが多少なりともあった。が、すぐに(い

い意味でだろうか）裏切られることとなる。突然ハヤテはナギのあごをくいっと人差し指でなで上げたのだ。ナギの体がポツとものすごく赤くなる。

「な、なにをするのだハヤテ!？」

「体が動かないなら……僕にすべてを委ねてみたらどうです? もうお譲さまの体は僕の思いのままなんですから」

「おい! ちょっと待て! ダメだったら! こんな……みんながいる場所で恥ずかしいではないかー!!」

どんどんとハヤテの顔が迫ってくる。たまらずナギは大声で叫んだ。

「ハヤテエー!!」

叫んだ瞬間体が跳ねるように飛び上がる。息が荒い。何より驚いたのはナギではなくハヤテだった。

「ど、どうされました!? お譲さま!?! いきなりー」

「お前こそいきなり何をしているのだ! やっていいことと悪いことがあるではないか!?!……ん?」

ナギは自分に注がれる目線に気付く。ハヤテ以下クラスメートがいきなり叫んだナギをじっと見ている。まだ授業中。教卓には雪路がまだいた。

「ちょっとちょっと。ナギちゃん? どうしたのよ」

「あ……え? なぜ授業をしているのだ? もう休み時間ではないのか?」

「お譲さま? もしかして夢でも見てたんじゃないですか?」

「そんなわけ……！たしかにあの感触は本物だった！」

今でもハヤテの指の感触が体に残っている。夢とはいえかなりリアルだったようでまだ体が熱い。夢ではない！とあくまで譲らないがいいかげん雪路がナギとハヤテを注意した。

「二人とも。ここは家じゃないんだから少し静かになさい。単位あげないわよ」

「あっ！すみません」

単位という言葉にハヤテはいち早く反応し謝った。改めて前を向くがナギは腑に落ちないのか謝らず視線を前から逸らし頬杖をついた。授業が再び始まるとナギはハヤテの背中を凝視し続けた。

「間違いない。あれは夢じゃない」

と言ったのは帰り際である。この日は最後まで夢（ナギにとっては現実のような）について考えていて睡眠どころでも授業どころでもなかった。ただの夢なら深読みすることはなかったろう。が、内容が内容なだけに深く考えていた。

（夢は自分の願望を表すという。いや、これは正夢になる可能性も……）

ぶつぶつ独り言のように考え込むナギを見てもハヤテはどうすることもできない。いかに執事でも主の夢にまで干渉する術はなかった。

「そんなに気になる夢だったんですか？」

「……うむ。偉人は偉業を達する前に夢のお告げを見えるというのがそ

れに近いかもしれんな」

「一体どんな夢を？」

「う……」

言えるはずない。口が裂けても言えない。だからこそどこかしのだろう。夢は他人に言っても伝わらないのが普通なのにそれを言わないで伝えようなど不可能に近い。ただハヤテが察しているのはよほど怖い夢かよほど続きが気になる夢なのかとしか考えられないでいた。

「そんなに気になるならいつそ実行してみたらどうですか？」

「は！？実行だと！？」

「はい。夢と同じことを現実でもやれば胸のモヤモヤも晴れるんじゃないですか？」

実に妙案だとハヤテは思ったがナギはまったく冗談ではないと半ば怒りを覚えていた。誰のせいでこんなに悩んでいるのかと言いたいくらいだ。もちろんハヤテが悪いわけではない。誰に責任があるわけでもない。夢が悪いのだろうがナギはハヤテに怒りをぶちまけた。

「そんなことできるわけないだろ！！ハヤテのバカバカバーカ！！」
「え！？？」

「お前に相談したのが間違いだった！」

「……すみません。力になれなくて」

ハヤテは落ち込んでしまったが何の落ち込む理由はないはずだ。ナギはハヤテの主と言えど悩みも聞かず力になるという方が難しい。このようにたまに理不尽な振る舞いをするナギに堪えるのもハヤテの役目と言えよう。が、さすがにずっと1人で落ち込んでいるわけにはいかない。

「僕はどうすれば良かったのでしょうか？」

「……はあ」

屋敷に帰るなり廊下ですれ違ったマリアに聞いてみた。ハヤテを悩ますナギはと言うと学校では干からびていたが屋敷に帰るとまるで水を得た魚のごとく元氣を取り戻していた。よほど学校が嫌いなのだろう。夢のことなどすっかり忘れ悩んでいるのはハヤテだけだ。経緯を聞いたマリアだがあまり深刻には考えない。

「別にいいんじゃないですか？もうあの子も忘れてると思いますし」

「……僕はお譲さまの役に立たないのでしょうか？」

「あら……」

マリアは同情した。ナギの時たま訪れる気まぐれというか軽率発言でここまで落ち込むハヤテにだ。しかも思考が後ろ向きなのでダメーシがさらに大きい。マリアも当然わかっていてすぐ慰めた。

「ハヤテ君ほどナギの世話ができる人はいませんよ。ナギも嫌なことがあってちょっとハヤテ君に当たっただけです」

「でもどうしてお譲さまが不機嫌なのかさっぱり……」

「忘れましょう。時が経てばナギの機嫌も直りますって」

「だといいんですが……」

マリアの読みは当たった。結局夜になる頃にはすっかりナギのハヤテに対する態度は元に戻っておりハヤテも安心した。なんとも気性の激しいことだろう。

だが夢の話はまだ終わらなかった。その夜、突如寝ていたナギは大声で叫び飛び起きたのだ。

「うわああああ!!」

「ど、どうしました!？」

「……ゆ、夢か……」

隣で一緒に寝ていたマリアは叫び声に反応しゆっくりと体を起こした。起こされたほうにしては迷惑であろうがそんなことを感じさせないくらいナギの表情は強ばっている。ナギは辺りを見渡しようやく落ち着いた。

「……すまん。起こしてしまって」

「いえ。それはいいのですが……一体どうしたんです? 怖い夢でも見たんですか？」

「怖い……と言うか……」

ナギはしばらく黙った。マリアはその沈黙が長引くにつれよほど恐ろしい夢なのだろうと心配していた。だが思わぬ言葉が出てきた。

「まるで私の望みを現実にしたような夢だったのだ!!」

「……はい？」

啞然とした。ナギの表情は驚くほど明るくなりどう返事をしたらいいのかわからない。だったらなぜ叫んだのか? と聞きたいくらいだ。

「しかし……最後の最後であれがブワッってなってグォッってなってしまったのだ! それでいきなり床が抜けて……」

ナギは目をキラキラさせながら夢の話をするが聞いているマリアにしてみればまったく理解できない話だろう。固有名詞はほとんど出てこない上、あれ、これ、と言われても何のことだかさっぱりだ。

聞いている内にだんだん眠気が襲ってきた。今何時なのか時計を見るとまだ2時。話をやめないナギを無理やり押さえつけ寝かせた。

「はいはい。わかりましたから明日にでも続きを話してください。
今寝ないと朝起きられませんか」

「うむ！そうだな！おやすみマリア！」

すぐに布団をかぶって眠りについた。まだしゃべり足りなかったが夢の続きが見られるかもしれないという期待が少しずつ膨らんでいる。半ばナギの夢に巻き込まれたマリアは幸せそうなナギの寝顔を見て眠りにつくが一体どんな夢を見たのか少し気になっていた。

結局翌日、マリアはこのせいで寝不足気味になっていた。昼間になってもどこか上の空であくびばかりしていた。

「眠そうですけど何かあったんですか？」

「……あ。ハヤテ君」

今気付いたかのようにハヤテの声に反応した。今の今まで一緒にガーデニングをしていたのに忘れていたようだ。

「そう言えばハヤテ君。学校は？」

「へ？何を言ってるんですか。今日は休日ですよ」

「ああ……。そうでしたね」

「大丈夫ですか？お譲さまもマリアさんも疲れてるんじゃないですか？」

「私は別に……。ところでナギがどうかしたんですか？」

「はい。さっき廊下で見かけたのですがなんだか窓の外を見てボーッとしていたんです。普通休日だと元気になるはずなんですけど……具合でも悪いのでしょうか？」

「どうなんでしょうか……？」

マリアはハヤテ以上にナギの様子を気にしていた。気にしているがさっぱりわからない。

「なら本人に直接聞いてみたらどうです？それが一番手っ取り早いんじゃない」

「僕もそう思ったんですけど……」

「言わないんですか？」

「はい。聞こうにも僕の顔を見ると目を背けてどこかに行っちゃって……」

「難しい年頃ですから……」

ナギの動向を聞きつついつい漏らしたがマリアはナギとわずかしき歳が変わらない。マリアが大人すぎるのだろう。

「まあ静かなのはいいことですし病んでるわけでもなさそうなので大丈夫ですよ」

「マリアさんがそう言うなら」

「あ、でもそれとなく見張っててくださいね。急に何かするかもしれないから」

まるで仮釈放中の罪人を見張るかのような口振りであった。昼になってもナギは窓の外を見たまま過ごした。時折ため息をつく。

ハヤテは偶然廊下を通りかかった時に悲壮な感じが漂う背中を見つめた。何かいつもと違う。

（一体何がお嬢さまを悩ませているんだろう……）

ハヤテまで困った顔になる。原因がわからない以上手の打ちようがない。すると背中に刺さる視線に気付いたのかナギは振り返った。

視線の先にはハヤテがいる。ハヤテはナギと目が合って無視するわけにはいけないので笑顔を作り歩み寄った。

「お譲さま。窓の外ばかり眺めてどうしたんですか？いつもならマンガを読んだりゲームをやったりしている時間なのに……」

「なあハヤテ……。人生って何なのだろうな……」

「え？どうしたんですか、いきなり……」

「生きる意味をお前はどうか考える？」

「ちよつと……なんだか話が唐突すぎて……」

「人間誰しも幸せになるために生きるのだろう？だが……なぜ幸せになるために苦勞をしなければならぬ？幸せとは苦しみの先にしか待ち受けていないのか？」

「あの……何があつたんですか？」

いきなり哲学、倫理的な話をされハヤテは困った。難しい話をされたこともあるがまさかこんな話をされるとは思わず不意をつかれた形になる。

「私は確かに金持ちだ。だがそれだけではないか。外面は金の力で富んでいても私の心は乏しくはないのか」

「そんなことないですよ」

「いや、ある。何かが私には足りない気がする……」

またまたナギは考え込んでしまった。確かに足りない部分はある、とハヤテも思う。おそらく常識だろう。常識と言っても知識としての常識ではなく生活面での常識がだ。

「なぜ私がこんな話をするのかわかるか？」

「えー……と。ちよつとわかりません」

「今朝な……テレビを見たのだ」

そりゃ見るだろう。ハヤテは思った。

「既に文明社会は頂点に達したと言ってもよい。だが……私は啞然としたよ。21世紀になったと言うのに身1つで海に潜り鉈で魚を突き刺し大声で『とったどー!』と叫ぶ輩がまだいたことにな……」

ナギは大真面目に話すがハヤテはきよんとしている。だがあまりに真面目に話すので声が出ない。

(違いますお譲さま!それは番組の企画で……!)

声を張り上げたかった。まさか番宣を鵜呑みするとはハヤテだっと思わなかっただろうがナギの真面目な顔を見れば見るほど本氣にしていると確信していく。

「私は笑ったさ。今の世の中、そんな苦勞をせずとも魚を得る方法などいくらでもあるのだ。市場に行けば魚など腐るほどいるらしいではないか」

「でもそれは漁師さんが取ってきた物で……」

「だがそいつの顔は驚くほどに晴れ晴れとしていたのだ。何度も何度も海に潜っては突き潜っては突き……。私だったらそんな面倒なことはしない。だが面倒なことをしたというのになぜあんな幸せそうなのか……。それに比べて私はどうだ?部屋にこもってゲーム、マンガ……。まったく苦勞をしていない。苦勞をしていないのに……あいつほど幸せな顔はできないのだ!なぜだ!?なぜ苦勞をしたあいつが幸せで苦勞をしていない私が幸せになれないのだ!?答えよハヤテ!!!」

「ええっ!?僕ですか!?!」

「お前は苦勞人だからその原理がわかるはずだ!!」

びしっ！とナギはハヤテを指差した。こんな質問を13歳の少女がして16歳の少年が答えねばならない。無理に決まっている。

「なぜ黙っている！」

「お譲さま。お聞きしますが大丈夫ですか？」

「ほう……。そこまで私を愚弄するか」

「い、いえ！そういう意味で言ったわけじゃないです！そうですね……。幸せとは……。知ることだと思います」

「知ること？」

今度はナギがきよとんとなった。今までの怒りが嘘のように収まりハヤテの言った意味を理解したくてたまらない様子になる。

「つまりは自分の知らない世界を知ると言うことです。今まで知らなかったことを知ることと新たな発見をしたり経験したりすることで興味がわき生き甲斐を感じるのだと思います」

「うーん……。よくわからんが難しい話をするなあお前は」

「お譲さまほどではないですけどね」

「確かに……。平凡な人生ほどつまらないものはないな。誰しも他とは違う人生を歩みたいというのが本音だろう」

ハヤテは内心驚いた。金持ちで広大な屋敷を持っている時点でもはや平凡ではないと思った。だがナギにとってはそれが平凡。当たり前前なのである。

しかしナギはそれに飽きているという。飽きているというより退屈なのだ。

「毎日毎日同じことの繰り返し……。時間も余裕も余るほどあるというのに何一つやらない私が不甲斐なくなってきた！ハヤテ！私は

決めた！私は刺激を求めに向かう！」

「刺激を！？危ないですよ！！ただでさえ刺激的な毎日を送っているのにさらに刺激的になつては……」

「甘い！甘いぞハヤテ！私の体は刺激を欲している！何か……何かを私は求めている！」

元氣を取り戻したことにハヤテは安心したが内にこもっていた熱が何やらおかしい方向に放出されている。熱すぎて某元テニスプレーヤーを見ているみたいだ。

「そこでだな。ハヤテ！お前に頼みがある！」

「はっ、はい！何でしょうか？」

「屋敷内にあるものでは私の求める刺激は手に入らない！よって今から外に出かけ刺激を見つけてくるのだ！」

刺激を見つけてこいと言われてもハヤテはどうしたらいいのかわからない。さらに言えば一番良いのはナギ自身が外に出かけるのが最も刺激的ではないのかと思った。そのことに触れたのだが一蹴される。

「私は行かないぞ。疲れるじゃん」

「でも屋敷ではお譲さまの欲求は満たされないのでは？」

「お前が外に行きここへ持ってくればいいのだ。刺激は欲しいが疲労はいらん」

ハヤテは困り果てた。この世に疲労なしで手に入る刺激があるだろうか。あったとしてもそれくらいなら屋敷にいても手に入りそうである。物品だったとしてもネット1つで容易に手に入る。

「つべこべ言わずにさっさと行ってこーい！！」

「わ、わかりました！行って参ります！」

追い出されるようにハヤテは屋敷を出た。

2章 出会いと出会い

ハヤテはふらふらと市街地を散策していた。

ナギに刺激を探してこいと言われたものの「刺激」が道端に落ちているわけでもなく対象がこれとはつきりきまっているわけではない。完全に途方に暮れている。断れば良かったのだが期待されている以上無下にするわけにはいかなかった。

（何かお譲さまが興味を持たれるようなものはないだろうか……）

唯一の救いはナギが世間一般に疎いことだ。頭脳明晰なことは間違いないがなにせ金持ち感覚が骨の髄まで染み込んでいるため庶民感覚がまるでない。ハヤテはそこを突こうとした。

（お譲さまを満足させるにはお金じゃだめだ。普段の生活にまったく関係のないことを探さない）

そんなわけでただの閑静な住宅街をうろろしている。とは言え本当に普通の住宅街なのでさしたる発見もない。時間だけが虚しく過ぎていく。やはりダメかとハヤテは思った。

と、半ば挫折しかけた時泳いでいた目が止まる。見知った顔と目が合った。合うなり間髪入れずに声を出す。

「あっ。ヒナギクさん」

「……ハヤテ君？何してるの？こんなところで」

一桂ヒナギク。ハヤテと同じ白皇学院に通う生徒会長。極めて成績優秀でさらに男子からの人気は高い。本人はあまり気にかけていないようだが。ばったり会うとヒナギクは不思議そうにハヤテを見

た。

「どこかに行くようには見えないけど……1人なの？」

「ええ、まあ」

「もしかしてまた家に帰れないとか？」

「そんな頻繁には追い出されませんよ。ちゃんと夜になったら帰ります」

「でも珍しいわね。てっきり休みの日はずっと屋敷で執事の仕事をっかりやってるのかと思ってたわ」

ヒナギクはハヤテが今はプライベートタイムなのかとばかり思っていた。1人で住宅街とは言えブラブラしていれば誰でも暇だと思はず。まさかこれもナギのために働いているとは思わなかった。しかしただブラブラしているだけが仕事とも言えずそのあたりはやむやになった。

「それよりヒナギクさんはこれからどこかにお出掛けですか？」

「そんなわけではないでしょ？どこだと思ってるの？」

語尾を強めちよいちよいとハヤテの右方向を指差す。ハヤテはようやくと言っていていくらの遅さで気付いたのだが今いる場所はヒナギクの家の前だった。ヒナギクにしてみれば学校帰り（休日だが無論部活か生徒会の用事があった）だったのでハヤテの反応があまりにおかしく笑ってしまう。

「なあんだ。知っててここに来たんだと思ってたわよ。てことは何？特に目的もないのにうろついてたわけ？」

「そう言われたらそうなんですけど……ちょっと刺激を探しています」

「刺激を探す？それってどういう意味なの？」

「別に僕は刺激は欲してないですよ。むしろいらなくらいです。お譲さまがそう言うものだから……」

「あはは。なるほど、それはかなりの難題ね」

事情がわかるとまた笑った。また妙なことを考えるものだところにはいないナギを笑ったがハヤテは至って真剣だ。ナギの影響が多分に大きい。

「そうだ！ヒナギクさん。お聞きしますが何か刺激的なことってありますか？」

「そう言われてもねえ……。別にないわよ。だいたい毎日毎日がそんな急展開じゃ体が持たないわ」

「それはもつともですけどなんとかお譲さまの興味を煽れるようなことはないですか？」

「なら毎日学校に来るよう言つてよ。話はそれからでしょ？学校も来ないで学校がつまらないって本末転倒よ」

「おそらく却下されます」

「でしょうね。だったら……スポーツは……無理ね。改めて思うと好き嫌いが激しいわね、ナギって」

「お譲さまが屋敷の外に興味を持っている間に外の世界の素晴らしさを教えたいんです。そうすればお譲さまも今の引きこもり体質からアウトドア大好き人間になると思うんですよ」

「まあそうなればいいけどまったく想像できないわ」

ヒナギクの頭の中にナギが現れ激しく運動した後に『汗かくって気持ちいいな！』と満面の笑みで言っているのだがあまりに非現実的すぎてヒナギクは1人で苦笑する。それでもハヤテは真面目に話す。

「では僕はまた刺激を探しに行きますね。お譲さまが待ってますか

ら」

「ちょっと待って。なんだか面白そうだし私も一緒に行ってあげるわ」

「いいんですか？僕が言うのもあれですけど、すごく面倒だと思いますよ」

「どうせ今日はもうやることもないし、その面倒事に付き合っただげる。ナギのためだもの。それに、ハヤテ君のためでもあるしね」

「本当ですか？ありがとうございます、ヒナギクさん！」

「い、いいわよ。バカ。そんな感謝しなくても……」

妙に感謝されヒナギクはちょっと恥ずかしくなり顔を逸らす。強気な表情は変えないが内心胸は踊っていた。

さて、ナギの様子は。

ハヤテを外に行かせてから1時間程になる。その間ナギは何もしていなかったわけではない。目の色を変えたように書斎でキーボードをカタカタと押し指をひたすら動かしていた。パソコンを動かす様子をマリアがじっと見ている。

「何を調べているんです？」

「……いや、この際だからいろいろ催し物がないか調べているのだ」

「え？催し物？」

「うむ。世の中の人間は一体どのような趣味を持って楽しんでいるのかと思ってな」

「なるほど……」

「しかし手頃なものが見つからんだ。東京ビツ○サイトや幕張○ツセで同人誌やガン○ムのイベントが行われる日にちは……」

世間の趣味とは言っているものの完全にナギの趣向そのままであ

った。これではあまり意味がないのではとマリアは思った。

「調べてどうするんです？」

「たまにはSPにばかり買いにいかせず私自らが行こうと思ったのだ。それだけでもかなりの進歩ではないか」

「確かにそうですけど、もっとまともな催し物に参加したらどうです？」

「何を言う。マリアは同人誌はまともではないと言うのか？」

「そうは言ってませんけどどうせ外に行くならいつもと違うことに目を向けてみてもいいんじゃないませんか？」

ナギは閉口した。言われてみればという気持ちが多少なりとも起きています。だが他に選択肢が出てこない。

「それにナギも女の子なんですから『らしい』趣味を1つや2つ持っていたほうが普通ですよ」

「……同人誌やガン〇ムは女の趣味ではないと言うのか？」

「まあなくはないですけど……普通はないと思いますよ」

「えー？マリアは頭が古いぞ。今の時代は男女平等。男だけがロボットやヒーローを追い求める時代ではない。いずれはヒーロー戦隊のレッドも女になる日が来る」

イスから立ち上がり力説するが聞かされているマリアは全然聞いていない。『古い』と言われ心に大ダメージを負っていた。そんなことなどお構いなしに話は続く。

「だいたいそう言うマリアも趣味という趣味はカラオケぐらいではないか」

「別に趣味というほどじゃありません。好きですけど……」

「じゃあマリア。マリアの趣味は何なのだ？」

「え？私？」

「うむ。いつも私やハヤテがいない時屋敷で何をしているのだ？」

やや上から目線でナギは問う。鬱憤が溜まっているようだ。聞かれたマリアもいざ考えると戸惑う。

「別に取り立てて趣味というものは……。お掃除、洗濯、料理にガーデニング……。その辺ですわ」

「それは趣味ではないのではないか？仕事だろ」
「……」

今度はマリアが黙ってしまった。これでは仕事一筋キャリアウーマンである。悪いことではないとは思うがなんせ実年齢は17。まだ仕事に身を捧げるような歳ではないはずだ。

「マリアこそ女らしい趣味の1つや2つ持ったほうがいいぞ。なんなら私が伝授してやってもよいが」

「うう……。なんかちょっとへこんできましたわ……」

「もう男が芝刈り、女は洗濯の時代ではないのだ。やりたいことを好きなようにやるぞ、私は」

「けどそれをやめて新しいことを知るためにハヤテ君を外に行かせたんじゃないんですか？」

一原点回帰。まさにそれである。張りのない日常を抜け出すために刺激が欲しいといいつつ、やりたいことをやると言うのは何か矛盾してはいないだろうか。するとパソコンを動かすナギの手が止まった。

「……そうだ。この手の話ならパソコンやマリアより役に立つ奴がいるではないか」

「え？どういう意味です？私はパソコンとおなじなんですか？」
「いや、そうじゃない。パソコンは確かにあらゆる知識を蓄えているが融通が利かない場合もある」

パソコンーそれは記憶力のいいバカと呼ばれるほどの存在なのだ。それはともかくナギの表情が明るくなった。ノートパソコンを勢いよく閉じて言う。

「こいつは頭が良すぎて平凡な考えができんだ。私が知りたいのは庶民の考え。庶民の考えは庶民に聞くのが一番だ」

「庶民……？」

「マリア。ちょっと出かける。我ながらいい考えだな」

「待ってください。ハヤテ君もいないのに1人で出かけるなんて……呼び戻してからにしません？」

「いや、いい。もしかしたらハヤテも今ごろすごい発見をしているかもしれないからな」

「なら……私も一緒に行きます。SPの方ではちょっと心配なので……」

何のためのSPであろうか。確かにハヤテに比べれば不安があるだろうがあんまりでもある。さらに続けてマリアが言った。

「それに……あちら様に失礼があるといけませんからね」

「ん？何か言ったか？」

「いえ。なんでもありませんわ」

作り笑顔でなんとかごまかす。マリアは勘でナギが誰のところに行こうとしているのかをうすうすわかっていた。

「マリアもこの機に庶民を知るチャンスだな」

百万の味方を得たようなそんな頼もしさをナギは感じていた。

結局徒では危ないということでSPの運転する車で屋敷を出た。どれくらいの道のりを来たかはわからないがナギとマリアを乗せたリムジンはごくごく普通のどこにでもありそうな団地の中へと入っていった。はつきり言って場違いである。

「よし、ここでいい。降ろせ」

（やっぱり……思った通りですわ）

団地を見てマリアは思った。マリアがわかるナギにとっての庶民の知り合いは1人しか浮かばない。

「でもナギ。どの棟のどの部屋に住んでいるのか知ってるんですか？」

「いや……。忘れた」

「忘れたって……。じゃあ一体どうするつもりですか？」

「決まってるさ。あっちから来てもらうのだ」

「もしかして電話で、ですか？」

「いや、それも違う。それに奴の電話番号は知らん」

「じゃあ本当にどうするんですか……」

だんだんマリアはわけがわからなくなってきた。電話番号は知らない。部屋の番号は覚えていない。これでどうやって意中の人を呼び出すのか。そう思っているとSPの1人がナギに指示され車内から拡声器を取り出した。まさかと思いマリアがSPからすぐに拡声器を取り上げた。

「ちょっと。何をするつもりですか？」

「あつ。マリア!その拡声器を私に貸すのだ!」

「いけません。そんな住民のみなさんに迷惑がかかるようなことをしたら」

「なら……地声で」

拡声器を諦め自らの腹の底から声を出そうとするもすぐにマリアに口を塞がれた。背中から抱き抱えられもがいている。

「ぶはっ。そんなに私がやろうとしていることがいけないのか?」

「当たり前です。ただでさえ目立っているのにこれ以上目立つのはよくありません」

「目立っているのか?私たち」

「ええ。とても……」

マリアはちらちらと目を泳がせ周りを気にした。めったに見たことのない本物のリムジンに目を奪われる一般庶民。たしかにこれだけ目立っていれば嫌でも周りを気にする。だがそれが逆に良かったように向こうから意中の人が来てくれた。

「……あれ?奇遇だね。こんな場所で会うなんて」

「おお!噂をすれば!」

「噂?私の?」

「他に誰がいる。わざわざ会いに来てやったのだ。ハムスター」

「だから……そのハムスターはやめてよね」

会うなり不機嫌そうな顔になったのは普通の女子高生、西沢歩。ナギが会いに来たのは彼女だ。理由はともあれ歩は今あまり悪い気はしていない。それどころかハムスターと呼ばれたこと以外は喜んでさえいた。

「もしかしてハヤテ君も来てるのかな？」

「ふん。残念だな。ハヤテはいない」

「えー。ハヤテ君来てないんだ……」

露骨に不満を顔に表す。ナギ、マリアがいてハヤテだけいないというのはあまり予想していなかったようだ。気落ちする歩をよそにナギはここに來た目的を達するため質問攻めをする。

「今、何をしていた」

「今……？何ってただ買い物してきただけだよ」

「そう言えばその大事そうに抱えている紙袋はなんなのだ？福袋か？」

「そんなわけではないでしょ。季節的に」

「じゃあパチンコで大勝したのか。フランスパンがはみ出してるぞ」

「法律が許しませんよ。パチンコは」

マリアがたまらずツツコンだ。それに加えて景品がフランスパン丸々一本というものないだろう。茶色い紙袋からフランスパンをはみ出しながら歩いている歩も歩でいかにもベタすぎる。中身はフランスパンだけではなくお菓子がたくさん入っていた。

「相変わらず食い意地の張ったやつだな。この雑種」

「うるさいわね！だいたいどうしてそんな喧嘩腰なのかな？」

たしかにその通りだ。わけもわからずいきなり押し掛けてきて悪口ばかり言われてはたまったものではない。仲裁に入るマリアもマリアで苦労していた。

「まあまあ。それよりナギ。西沢さんに何か他に聞きたいことがあるんじゃないでしたっけ？」

「おお。そうだった。ついつい忘れるところだった。ハムスター、よく聞け」

「それが人に物を聞く態度かな……」

「興味関心の薄いお前にわざわざ私が聞いてやっているのだ。文句を言うな」

あまりに傍若無人な態度に歩は眉をピクピク動かしていた。怒るに怒れないのはナギの背後にいるSP部隊のせいだ。ナギに手を出して逆に襲われでもしたら敵わない。

「すみません西沢さん」

「いえいえ……」

マリアがいるのが唯一の救いといっていい。歳上（1つしか違わないのだが）の人から頭を下げて謝られたらさすがに歩としても遠慮する他ない。ひたすらに堪えた。

「聞くがハムスター。お前は何か習い事とかしていないのか？」

「へ？習い事？」

「言わば趣味だな。庶民は暇な時間をどのように過ごしているのか知りたいのだ」

「趣味ね……。習い事なら昔、家庭教師の先生が来てたことがあるよ」

「知らん。そんなありふれた回答はいらん。もっとなんか胸にズキユンとくるような暇潰しはないのか？」

ナギが期待しているのは優等生回答ではなく個性的な回答だ。が、普通の女子高生の歩にそんな答えを出せというのが間違い。実際歩から見ればナギの生活そのものが胸に響くどころか胸を貫通して破裂させるくらい衝撃的はずだ。

「なら質問を変える。休日は何をして過ごしてるのだ」

「だから言ったよ。お買い物だよ」

「趣味が買い物とはお前はよほどの浪費癖が染み付いているのだな。ショッピングとかかっこいい言い回しにしても実情は浪費だろ」

「たしかにそれはそうだけど……」

「それにお前みたいに食材ばかり買うのを買い物と言わん。買い物出しの間違いだ」

「どう違うのかな？」

「買い出しは買いに出かけることで買い物は物を買うことだ」

「同じじゃないかな」

「違う。買い出しは家にいる時点で買うものが決まっていて後は店にいくだけだが買い物は何を買うかが漠然としか決まっていなくて現地で品定めをすることを言うのだ」

「言われてみればたしかにそうかもしれないかな……」

「そのフランスパン、たまたま見掛けたから買ったのではあるまい。買うと決めて出掛けたのだろ？ だったらそれは紛れもなく買い出しだ！」

これはあくまで1つの持論に過ぎない。信憑性は薄いので鵜呑みになさるぬよう。

「で、違いはわかったけど……それで？」

「うぐ……。にぶいやつだ。もっとこう楽しい趣味はないのかよ。」

お前のすべては買い出しとひまわりの種だけなのか？」

「余計なのまで混じらせるのはやめてよね」

「気にするな。冗談だ」

「笑えないよ」

歩は疲れていた。度重なる身勝手な振る舞いに加え意図の読めな

い質問の数々。

「じゃあ聞くけどナギちゃんは楽しい趣味を持ってるのかな」

「愚問だ。それに言うが私の趣味の偉大さがわかるお前ではわかるまい」

「そういうのが趣味でしょ？」

「なに？」

「他の人にはわからないかもしれないけど自分だけが時間も忘れて熱中できるものだよ。人の趣味にケチつけるのはちよつと筋違いなんじゃないかな」

「言うではないか。気に食わんが一理ある」

この日初めてナギは歩の意見に耳を傾けた。軽くうなずいてみせる。

「だったら聞くが普通趣味と言えば何があるのだ？」

「普通……フットサルとかかな」

「太ももサル？なんだその生き物は」

「動物じゃないよ。スポーツだよ。スポーツ」

スポーツと聞いた途端ナギの顔が冴えない表情に変わる。ちなみに歩は「練馬のベツカム」と自称していたりもする。ただし実力は未知数である。

「マリア。ここにも『らしく』ない趣味の持ち主がいるではないか」

「運動は男女平等です」

「な、なんだよそれは！さっきと言ってることが違うではないか！」

「女性だけが家事をする時代ではないということですよ」

ついさっき言われたようなセリフをマリアはそっくりそのまま返

してみせた。

だがこの言葉に唯一歩が反応した。

「そう言えばナギちゃんってお料理とかできるのかな？」

「なに？料理だと？ふん。そ、それがどうした」

「だって……1人の女の子としてお料理くらい人並みにこなせなきゃ」

にこりと笑う歩に対しナギは明らかに動揺していた。素直にできないというのもプライドが許さない。それを読み取ったのか歩は一気に攻勢に出る。

「あれ……？もしかしてナギちゃん、料理できないとか……？」

「なに？誰に向かって言っている。私に料理を作らせたらどうなると思っている。全世界の人間が私の作った料理以外食べられなくなるぞ」

「本当に？」

「本当に決まっているではないか。ハヤテなんて私の料理を残さずきれいに平らげてくれたのだぞ！」

多少むきになっていた。まさか自分の失敗に気を配って無理して食べてくれたとは言えない。言わなければいいものをさらに続けて見栄を張った。

「そんなに私の実力を疑うと言うのなら……勝負だ！私とお前でどちらがハヤテの心を射止められる料理を作れるか競うのだ」

「え？な、なんでハヤテ君が出てくるのかな」

「怖じ気づいたか。もしやお前の作る料理はあまりのひどさに人に振る舞うこともできないくらい粗末なものなのか？」

「……わかったわよ。そこまで言われて引き下がるわけにはいかな

いわ。やってやるわよ！」

「ふん。後悔するなよ。ハヤテの前で大恥をかくお前の姿が目には浮かぶわ！」

お互いに顔を睨み火花をバチバチと散らす。話がこじれなければいいなとマリアは作り笑顔で2人を温和な態度で見つめた。

一方ハヤテであるが。

普通の中から刺激を探そうとしていたが矛盾に苦しんでいた。ありきたりの中からありきたりでないものを探しても見つかるものではない。悩んだ挙げ句なぜか喫茶店に入りお茶をしていた。無論ヒナギクも一緒である。

「あの……ハヤテ君？どうしたの？喫茶店になんか入って……」

「気にしないでください。お金は僕が持ちますから。何を食べますか？」

「そういうことじゃなくて。おごってくれるのは嬉しいけど……」

ヒナギクは事前に運ばれてきたメニューに目をおす。一通り見た後にハヤテの顔を見た。

「なんで喫茶店に入ったのかってことよ。全然関係ないじゃない。ハヤテ君は何かナギの興味をひけるようなものを探してるんじゃないのか？」

探しに探して約1時間。結局歩き回って何も見つからず最後は喫茶店、ではただの無駄骨ではないかとヒナギクは思っていた。

「諦めるつもり？」

完全主義者のヒナギクとしてはちょっと許せなかった。両肘をテーブルにつけながらハヤテを威圧した。

「まだ諦めたわけじゃ……。それに……。申し訳なくて」

「申し訳ない？何が？」

「せっかくヒナギクさんに協力してもらったのに成果なしで……。でも何もお礼をしないわけにはいきません。ここは男としてヒナギクさんにおごらせてください」

珍しく語尾を強める。言われたヒナギクも悪い気はしないが一応遠慮はする。

「だから。ついていくって言ったのは私だからそんなに気にしなくてもいいのに……」

「でも……こういう時は休憩するのもいいじゃありませんか」

「のんきね。まあハヤテ君がそこまで言うなら。だいたいもうお店に入っちゃったし……」

「ありがとうございます。一休みしたらまた探しに行きましょう」

「そうね。……ねえハヤテ君。もう一回聞くけど何を探せばいいの？」

「お譲さまが興味のわくような……。やっぱり漠然としすぎですか？」

「ちよつとね。さつきも街中見て歩いたけど……」

ヒナギクはかわいい服やぬいぐるみを見つけてもお金持ちのナギなら自分で買うだろうなと選択肢から消え、ゲームやマンガなどを見つけてもヒナギクにはよくわからないので良し悪しがわからない。見つからなくて当然であろう。

「ここは視点を変えるわ。物はダメ。お金でなんとかやるやつは却下よ」

「物以外で興味をひけるものですか……。さらにハードルが上がったような……」

「元々高かったけどね」

ヒナギクは笑った。

「そうだ。動物の飼育とかどうかしら。きっとすごく楽しいんじゃない」

「動物は既に屋敷に……」

「……そうだったわね。じゃあスポー……」

言いかけてヒナギクは言葉が止まった。さすがにもう無理だと理解した。

「あーもう。なんで考えてるだけで頭が痛くなるのかしら。これ、本当に解決策あるの？」

「あると思います。なければ……作りましょう」

「何か策があるの？」

「はい。……と、その前に何か頼みませんか？」

「そ、そうね。もうお店に入っただいぶ経つわね」

ハヤテは店員の視線を感じたためにヒナギクに言った。慌てて2人は適当にメニューを選ぶはめになってしまった。

2人が「当店オリジナル」と大々的に書かれたチョコレートケーキを頼んでしばらく時間が経っていた。待っている間がやたら長く思えてきて空気がよどんできた。気をきかせてハヤテが話題を作る。

「遅いですね」

「……そろそろよ。きっと」

会話終わり。結構な広さがある喫茶店にしては客は他に2、3人がちらほら見受けられるだけで団体客はハヤテとヒナギクだけでとても静かなのだ。音楽の1つでもかかっていたら少しは違うのだろうがそれもなく古風な鳩時計の針がカチツカチツと進む音がやたらと耳に残った。居たたまれなくなってきたところでようやくケーキが運ばれてきた。店員は軽く会釈をし下がっていった。

「なかなかおいしそうですね。上に乗ってるのは……アーモンドですね」

「あ、これって段違いでクリームの層まであるのね」

「凝ってますね」

「ええ。そうね」

出てくるなりケーキへの感想を連発。話題に乏しかったので当然といえば当然だ。しばらくケーキを見ているうちにハヤテは何か閃いた。

「ヒナギクさん。いい考えが浮かびましたよ」

「え？ いい考え？」

「はい。……料理教室なんかどうでしょうか？」

「料理教室って……もしかしてナギが？」

「まあいきなりケーキは無理でも頑張って料理をしてそれがおいしければお譲さまも料理にすごく関心を持つと思うんですよ。それに……お譲さま、ちょっとは料理を学んだ方がいいんじゃないかと思っ
つて……」

「そうね。確かに人並みにはできた方が無難よね」

ナギの料理の酷さはハヤテもヒナギクもわかっていた。下手というより根本からなっていない。基礎から学ばせなければいけないだろう。

「でも……それならハヤテ君が教えたらいんじゃないの？料理教室じゃなきゃダメなの？」

「ダメということはないですけど、どうせならこれを機会にいろんな人たちと交流を持てたら僕としてはすごい嬉しいので」

「なるほどね。なら、私も協力してあげる」

「なんだかヒナギクさん、すごい積極的ですね」

「悪い？私に関わると迷惑なの？」

「いえ、そういうわけでは……。だからそんなに怒らないでください」

「怒ってないわよ、バカ」

と口では言うが多少はイラッとしていた。後に引きずるようなことではなかったので結局すぐに忘れたのだが。

「じゃあ日を追ってヒナギクさんには連絡しますよ」

「わかったわ。ナギ、納得してくれるといいわね」

話はまとまった。だがハヤテはナギが料理教室に行くことに乗ってきてくれるのか一抹の不安があった。その不安もすぐに取り払われることをまだこの時点では考えてすらいなかった。

3章 愛と勇気

打ち合わせと称してナギは強引に歩を屋敷に連れてきていた。料理で対決するという大筋は決まったが具体的な内容まではまだ決まっていなかった。

応接間でなくナギの自室で話をしていた。向かい合いになり何やら一枚の紙を見ていた。

「まずここに何を作るかを書くのだ」

「え？ 私が書くの？」

「当たり前ではないか」

「レシピを書くって……勝負はそこから始まってらんじゃないのかな」

「料理対決について私はいろいろ調べたのだ」

正確には調べさせた、といったほうが正しい。屋敷に着くまでにSPに命じこの手の知識をネットから得ていた。

「よくある料理対決では自分の得意、作りたい料理を作って勝敗を決めるというのがメジャーだ。しかしそれでは本当の勝負にはならないような気がしてならんのだ」

「でもそれが腕前を披露するのに一番なんじゃないかな」

「違う。それは勝負にはならん。手っ取り早く白黒つけるには同じレシピで同じ料理を作るのが妥当だと思わないか？」

「……そう言われればそうかも」

「よくあるテレビ番組では伊勢エビとか一頭からほんのわずかしか取れない高級な肉を使ったりしているが……それほどの上質な食材を使ってうまくない料理を作る方が至難の技ではないのか。料理の前に食材で8割方勝敗は決しても過言ではない！」

ナギは力説する。タイミングよくマリアが茶菓子を持ってきた。話は一旦途切れた。

「この茶葉もこの茶菓子も三千院家御用達の超一流の素材を使っている。誰がどう煎じてもうまいに決まっている」

ナギの言葉にマリアは疑いを感じた。その超一流の素材を使ってもナギの料理は酷くなるだけなのだから。

「じゃあもしかして私もその超一流素材で料理できるってこと？」

歩はめったにない素材を使えるかと思うとテンションが上がった。もう作ることより食べることに頭がいきつつある。

だがナギは首を横にふる。

「誰がお前に使わせるものか。お前になど三千院家から出たゴミもやらん」

「んな！酷いよ。だいたいゴミはいらないよ」

「マジになるな」

余裕の表情でナギは歩に接している。シャーペンをくるくると回し頬杖をついた。

「とうかナギ？勝負の前に料理を学んだ方がいいんじゃないですか？」

「なに？どういう意味だ、マリア」

「いえ。料理はそんな勝ち負けを競うものではないですよ。おいしいものに順列はありませんわ」

「でも……だったらどうやってどちらが上か決めるのだ？」

「うーん……。別に決める必要はないんじゃないですか？料理とは……食べてくれた人が喜んでくれればそれでいい、と思いますよ」
「おお……。なんだか格言っぽいセリフだな。なら……勝負はやめにする」

ナギとしては助かった。歩に対しては弱味を見せたくなかったが自分の料理に対する自信もあまりなかった。なんとか引き下がるタイミングを探していたがマリアの意見に賛成したと言えば自ら敗けを認めたことにはならない、と思ったからだ。

だが自分が料理ができることはなんとか示したい。

「なら今からでも作ってやる。私の料理に舌鼓を打つがいい」

「え？私に作ってくれるの？」

「冷凍食品だけしかまともにできないお前と違い私は本格的な料理ができることを教えてやる」

「なっ……。私だってやろうと思えば作れるもん」

歩は眉をつりあげながら言った。意地と意地のぶつかり合いだ。またまたマリアが仲裁に入った。

「2人ともそんなに言い争わなくても……。そうだ。ハヤテ君に作るっていう案があったじゃないですか」

「おお。そう言えばそうだったな。ついすっかり忘れるところだった」
「勝敗は抜きにして……ベストを尽くしてハヤテ君がおいしいと言ってくればそれでいいじゃないですか」

言い争いを終了させるべくマリアはハヤテの名をやたらと出した。知らないうちに話がどんどん進んでしかもその渦中のど真ん中にいるとはハヤテは夢にも思っていないだろう。

ハヤテがいなければ話にならない。ナギは歩とこれ以上話しても

何も進展しないと思った。

「よし。ハムスター。もうお前は用済みだ。今日のところはこれで帰ってもらおうか」

「ええ？ そんな。ナギちゃんはよくても私がよくない」

「言っておくがハヤテには会わさん」

読まれていた。歩としては罵声を浴びてまでせっかくハヤテの住む三千院家まで来たというのに肝心のハヤテにまったく会えないというのは未練を感じていた。だっ子のように体を左右に揺らした。諦められない気持ちがひしひしと伝わってくる。

「いいから帰れ」

「嫌！」

「子供かお前は」

「まだ10代だし日本国憲法の下では子供だよーだ」

「開き直ったか……。仕方ないやつめ。なら……。明日、またここに来い」

「え？……いいの？」

「なんだよ。帰れと言えばただをこねるし来いと言えば疑うとは……。お前の気持ちはどっちなのだ？」

「決まってるよ。来るに決まってるじゃない。でも……。どうして」

「一度約束したからな。私とお前でどちらがハヤテの心をがっしりと掴む料理を作れるかを競う。それに私の料理を喜んで食べるハヤテの姿をお前の目にしっかりと焼き付けてやるのだ」

「なるほどね……。わかったわ。私、負けないから」

「ふん。望むところだ」

この日歩はこれで帰ったがまたしても対決色が強くなってしまったことにマリアはあきれ果てていた。熱くなるのはいいが冷めた後

の反動が恐ろしい。

「マリア。明日の夕食は作らなくていいからな。私がよりによりをかけて豪華なディナーを振る舞ってやるぞ」

「そうですか。……ってあれ？私も食べるんですか？」

「もちろんだとも。ハヤテ1人ではとても食べきれまい。そうだ。人を呼ぼう。せっかくだからハムスターのやつに私のスケールの大さをまざまざと見せつけてやる」

目を輝かせているナギに対しマリアは苦笑するしかない。皆と苦しみを分かち合うディナーにならなければと切に願った。

（失敗した時のことを考えた方がいいのかしら……。でもいたずらにナギの気持ちを乱すのも……）

メイドさんは苦悩した。結果が九分九厘見えているとは言え残りわずかな可能性にかけるのかどうか。

「とりあえず……何か必要があれば言ってください。1人でことを急がないように」

「うむ。ありがとうマリア。私はちょっと調べものをしてくる」

ナギはイスから立ち部屋を出た。行き先は書庫であった。ナギがいなくなったあとにマリアはため息をついた。

（なんにせよ……いろいろ大変ですね）

引きこもるナギにも手を焼き何かを始めようとするナギにも手を焼く。幼少の子を育てる親の気持ちとはこのようなものかなとマリアは苦笑いするしかなかった。

歩と入れ違いでハヤテが屋敷に戻ってきた。歩にとってはつくづく運がないという他ない。まずハヤテがしたのはナギへの報告だった。

「お譲さまー。お譲さまー」

いつもならすぐに返事が聞こえるはずだがやけに静かだ。するといきなり後ろから肩をポンと叩かれ「ひゃあ」と驚いた。マリアである。

「マ、マ、マリアさん。いたんですか……」

「いますわ。そんなに驚かなくても……」

マリアはにこりと笑う。ハヤテは心臓バクバクだった。胸に手を当て一息ついた。

「そうそう。ナギなら今は書庫にいますよ」

「え？ 書庫にですか。何をしているんでしょうね」

「嫌ですわ。書庫なら本を読んでいるに決まってるじゃないですか」「マンガですか？」

「……調べもの、と言ってましたよ。ハヤテ君のために……」

意味深な発言。ハヤテは背筋がゾクツとした。

（なんだろう……。あんまりいい気にならないのは……）

ナギのやろうとしていることが薄々勘づいているみたいだ。

「なら僕も書庫に行ってみます。少しでもお譲さまの力になりたい

ので」

「それがいいと思いますよ。歯止めをかけるのもハヤテ君の仕事ですし」

「歯止めって……明らかに嫌な流れじゃないですか」

「そんなことはありませんわ」

ハヤテを油断……いや、安心させるために持てる限り最大限の笑顔でマリアはして見せた。普通笑顔はかわいいものだが今のハヤテにとってはえらく不気味に思えてきた。

「怖いです」

「何がですか。もう。そうだ、ハヤテ君。何かナギの喜びそうなこととは見つけられましたか？」

「それなんですけど、いいのが見つかったんですよ。ずばり料理です」

「料理？」

マリアは聞き直した。ナギが考えていることも料理に関することなのでまさかの一致に驚いたのだ。これは案外良い方向に向かうのではとマリアは期待した。

「料理ですか。いいかもしれませんわ。ナギもきつとその気になってくれるでしょう」

「でも……心配なのはお譲さまが外に出てくれるかどうかですね」

「外に行くんですか？」

「そのつもりですけど」

ハヤテは平然と言ったのける。マリアはナギと歩との間で謎めいた料理対決が行われるの言うべきか迷った。だがこのことはやはりナギ本人から伝えてもらおうと自重した。

「どうしました？ マリアさん。顔色が優れないようですけど」
「いえ。ちょっと疲れただけです。朝からいろいろ引っ掻き回されたので」

肩を上下に動かす。よほど凝っているらしい。何度も言うがまだ17歳。

「さあさあハヤテ君。さっさとナギのところに行ってください。あの子もハヤテ君の力を借りたいはずですから」

「はい。今がお譲さまを引きこもりからさよならさせる千載一遇のチャンスですから頑張ってくださいます」

「ゆるりとやってきてくださいね」

マリアは柔和な笑顔を終始貫いた。うふふと笑いながら手を振る。反応に困ったハヤテはとりあえずマリアと同様に笑うしかなかった。

女が真剣に料理をすることは同じように真剣に惚れた男がいる。

大沢在昌の言葉である。今のナギはまさしくそれであった。料理そのものはしていないが書庫で小一時間ずっと料理について調べものをしていた。経験がない分知識で補っていた。とはいえ読んでいるのはすべてマンガ。『美味○んぼ』『クツキン○パパ』料理マンガを片っ端から読破するつもりだ。

「……見るのは容易いがなんて面倒なことをするのだ。もっと簡単にうまくできる料理はないのか」

「鯉の洗い……これはお譲さまには難しいですよ」

「うわ！ ハヤテ！」

びっくりして振り返るとハヤテが後ろからマンガを覗き見ていた。

危うくイスから転げ落ちそうになるがギリギリ耐えた。

「び、びっくりするではないか。いるならいるって言ってくれ」

「すみません。お譲さまがあまりに集中していたので邪魔したら悪いかと思ひまして」

「その気配りが心臓に悪い。それよりご苦労だったな」

「はい。あのお譲さま。なぜ急に料理マンガを読まれているんですか？」

「え？ ああ……それは……」

頬を赤くして目を背けた。マンガをパタンと閉じるともじもじしながら言った。

「じ、実はな、ハムスターと料理対決をすることになってその……お前に私の料理を食べてほしくて……」

「ハムスター……ああ、西沢さん。僕のために料理を作ってくれるんですか？」

「ああ。そうだ。食べてくれるよな？」

「……もちろんですよ」

ハヤテが答えるとナギの顔がパツと明るくなった。食べてくれるとわかれば俄然やる気が湧いてくる。

「ありがとうハヤテ。私、頑張るからな」

「はい。それよりどうしていきなり料理を？」

ハヤテにしては意外や意外のナギの行動。熱しやすく冷めやすいナギの性格を考えるとまた唐突に思い付いたなと複雑な思いだった。

「なに。たいしたことではないのだがハムスターのやつが私が料理

ができないと勘違いしているから黙らせてやろうと思ったのだ」

「なるほど。それで料理マンガを読んでいると」

「うむ。それにいつもハヤテやマリアにばかり作らせるのも悪いし日頃の感謝を込めて私がディナーを振る舞ってやるぞ」

「ああ……嬉しいです。お譲さま」

口ではそう言うがとんでもない感謝の気持ちがかかるのではと恐ろしくもあった。胃袋に入るものなので最悪生死に関わりかねない。さすがにそこまで思っていないが類する危機は感じていた。

「それよりハヤテ。1ついいか」

「なんででしょうか？」

「さ・し・す・せ・そ……ってなんだ？」

「ああ。料理に必要な調味料のことです。さ『砂糖』し『塩』す『酢』せ『醤油』そ『味噌』ですね」

「そうなのか……。そはソースだと思ってた」

「ありがちな間違いですね」

「ありがとうハヤテ。あと、この蛇腹切りと言うのは一体……」

この後しばらくハヤテはナギの質問を丁寧に答えていた。知識を得るのはいいことだが料理には多少の勘が必要なことをナギは知らないので用語や方法を学んだだけでできたような気にどんどんなっていた。

「ふう……。この私の才能にこれらの知識が加われば未だかつてない孤高の料理ができるはずなのだ。な、ハヤテ」

「はい。頑張ってください、お譲さま」

ハヤテは思った。確かにナギの料理の腕は下手だが自分が適度にサポートすれば大丈夫だろうと楽観視していた。

ナギはずっとマンガを読んでいたので疲れたのか背伸びをすると積み上げたマンガをそのままに書庫から立ち去った。そして夕食を食べるとすぐにベッドに入った。やけに早い就寝にマリアは驚いた。

「どうしました？気分でも悪いんですか？」

「違う。明日はきつと大忙しになるだろうから今のうちに英気を養っておくのだ。そうだ。マリア、頼みがある」

「なんででしょう？」

「呼べるだけ人を集めておいてくれ」

「……もしやそんなにたくさん料理を作るつもりで？」

「ああ。もちろんだ。やるなら派手にやるのが私流なのだ。じゃっ」

それだけ言うとともに掛け布団をかぶり眠りについた。マリアは人を集めろと言われたもののあまり大事にはしたくないのが本音だ。

朝が来るなりナギは活発に動き始めた。

平素あんなに起きたくないと言っているにも関わらず8時には既に起きていた。休日に、しかも自分の意思である。いつもならまだ深夜32時だとか言って起きないのだ。

「さてと……何を作ろうかな」

「え？まだ決めてなかったんですか」

キッチンに立つナギにハヤテが付き添っていた。無論危険の芽をすばやく摘み取るためだ。

「優れた料理人は当日仕入れた食材でもって何を作るのか決めると本で読んだことがあるぞ」

「それは魚介類とか取れるものが不確定の料理に限るんじゃないで

すか？今ならスーパーに行けば何でも揃ってますよ」

「そうなのか。なら……今から私自身がスーパーに行き買い物をする」

「え？わざわざそこまでしなくても……」

「やるからには徹底的にやる。それが私の流儀だ。ハヤテ。お前も来い。こういうのは専門家を伴うに限る」

「専門家……僕がですか？」

「うむ。ハヤテならスーパーのことを何でも知ってるだろう？攻略法を私に伝授してくれ」

「攻略法ってほどのことはないですけど……お役に立てれば付き合いますよ」

「うむ。よろしく頼むぞ」

買い物に行く決めるとすぐにキッチンを飛び出した。ここ一番の決断力、行動力は驚嘆するものがあつた。普段からこれくらい活発に好奇心を持ってくれたらなんとハヤテは心の奥底で思った。

「まあそれがあの子のいいところでもあるんですけどね」

「わ！マリアさん！」

「……なんですか。昨日といい今日といい……私を見るやオバケを見たみたいに驚いて。小心者ですね、ハヤテ君は」

ちよつと声をかけたただけなのに驚くハヤテを見てマリアは機嫌が悪くなった。ハヤテは悪意がないことを必死に伝えようと頭を何度も下げた。

「許してあげますよ。それよりナギのことしつかり見ていてくださいね。何を仕出かすかわからないので」

「大丈夫ですよ。危険なことをやるわけじゃないんですから」

「それはそうですけど万が一ということもあるじゃないですか。私

もついていきたいのは山々なんですけど……」

マリアはナギに頼まれたことを話した。あまり乗り気でないのが口調でなんとなくわかった。

「とりあえず来てくれそうな白皇学院の方々を誘ってみます。本当は伊澄さんとか咲夜さんも誘いたかったんですけど……」

わかっている時点で伊澄はちよつと目を離した隙にストックホルムに行ってしまったらしく咲夜もナギの料理に毛ほども期待してないのでやんわり断られてしまっていた。だとすれば後は白皇学院のナギと親しい者しか選択肢は残っていない。

「なんとか0人という事態は避けたいですね」

「ええ。ハヤテ君も暇を見て誰か呼んでみてくださいな」

「はい。なんとか誘ってみましょう」

ハヤテはナギに付き従うためすぐに後を追った。だんだん話が大きくなってないだろうかと不安でもあった。

スーパーに着くとナギはキョロキョロと落ち着かない感じだった。いつもパソコンでしか買い物をしたことがない彼女にとっては新鮮そのもの。

「これがスーパーか……」

「っってお譲さま？ 以前にも来たことがあるじゃないですか」

「そうだったっけ？」

頭の片隅にあったスーパーのイメージは全て塵と消え初めて見る景色となっている。それだけスーパーに縁がない。

「和田○キ子もこんな気持ちなのだろうな」

「それはわかりませんけど……とりあえず人が多いのではぐれないように気を付けないと」

休日なので尚更人が多い。ナギはそれだけでもかなりのストレスを感じていた。人払いしそうな勢いである。

「こんなに多いとあれだな。ゆっくり見て回れないな」

「そんなことないですよ。人の流れというものもありますからそれに乗っていけば案外見て回れますよ」

「ハヤテがそう言うなら間違いないな。よし。行こうか」

「待ってください。いきなり行くのは危ないですから……」

ここは都内有数を誇る大型店。ちょっと目を離れた隙にナギがいなくなる、ということがないと言い切れない。

「僕が道を開けますからお譲さまは後からついてきてください。そうすれば迷うことはないです」

「なるほどな。よし、わかった。ハヤテだけをしっかり見てついていく」

「気になる物があつたら言ってください。すぐ止まりますから」

「うむ。大丈夫だ」

ハヤテは買い物かごを持ち人混みの中に身を投じた。ナギもハヤテの通った道を素直についていく。だがハヤテは考えが甘かった。10mくらい進んだところで一度振り返るがもう既にナギの姿が見えなかった。

（え？まさかこの短距離でもうどこかに行っちゃったんですか！）

周りの客に配慮して大声でナギを呼ぶことはしなかったが今来た道をまた戻ってナギを探す。探すが本当に視界から消えていた。ただの迷子ならまだしもナギを狙った誘拐犯の可能性がなくはない。ハヤテの背中に冷たい汗が流れる。

ナギはハヤテの思っているほど危機感を感じていなかった。

ハヤテについていったつもりがいつの間にか人の波に遮られポツンと1人初めて来たスーパで立ちすくんでいた。だがはぐれたとは思っていない。

（まったく……ついていいたと言った矢先にいなくなるとは。しょうがないやつだな、ハヤテは……）

負けず嫌いなのだ。あくまでもハヤテが迷子になった程度にしか感じていない。とは言うものの1人ではさすがに（ハヤテが）心細いのではとこじつけて探すことにした。だがスーパに迷子センターがあるわけなく探すのは難しい。待っていればいいものを自由気儘に歩き始めた。

山のように置かれている野菜やきらびやかに光り鮮度を保っている魚。屋敷にある同じ類いの菓子類。どこを見ても物、物、物でごった返している。口を開け見入っているとボンと肩を叩かれた。

「ハヤテか？」

「違うわよ。……珍しいわね。ナギがこんなところに来るなんて」「なんだ。ヒナギクか」

振り向けばヒナギク。

「何してるの？」

「いや迷……じゃなかった。実はハヤテと買い物に来たのだがあいつ、勝手にどこかに行ってしまったのだ。見てないか？」

「ハヤテ君？見てないけど。だいたい私も今来たばかりだし……。買い物って何を買いに来たの？いつもならマリアさんが買い物に行ってるんじゃない？」

「確かに。だが今日は特別だ。私自らが食材を買い料理を作るのだから」

「え？料理？」

（なるほどね……。ハヤテ君もやるじゃない）

ヒナギクはクスリと笑った。すっかりハヤテがナギを説得したものだと思っただけからだ。

「何か可笑しいか？」

「いや、なんでもないわ。それで……。何を作るの？」

「いや、決めてない」

「決めてないって……。それじゃあ何を買ったらいいか決まらないじゃない」

「そんなことはない。適当に私がこれは使えそうだと思った物を買ってそれから何を作るか決めるのだ」

「……すごい無謀だと思うわよ、それ」

「何を言うか。やってみなければわからん。もしかしたら今まで作ったことも食べたこともないような料理が生まれるかもしれないではないか」

「創作はナギにはまだ早いわよ。まずはちゃんと既存の料理から作れるようにならないと」

「和菓子職人だって日々開発を重ねて新しい和菓子売り出しているって聞くぞ」

「それは職人の話。ナギは素人じゃないの」

ヒナギクは呆れた。料理をしようと云ったと言ったでむちゃくちゃに我流であるからたまったものではない。なんとかナギにわかるように説明する。

「基本ができて初めて応用に取り組めるの。いきなり何段飛びするつもりよ」

「私は常人より歩幅がとてつもなく広いのだ」

「そうじゃなくて。そうだわ。私が買い物手伝ってあげるから、これを機にナギも勉強しなさい」

「えー？手伝ってもらえるのは助かるが独創性が失われる危険が……」

「一旦考えを改めてよね」

それでもナギはブーブー文句を言う。しかしナギ1人では本当にどうにもならないことをヒナギクは知っている。だから見過ごせない。

「いいから来なさい！」

「お……おお」

最後は威圧され屈した。

4章 創意創作

まずナギが言ったのは料理のコンセプトであった。

「私が作りたいのは疲れが取れるような、そんな料理だな」
「へー。なるほどね」

迷わないようにナギの手を握りながらヒナギクは頷いた。いろいろと目で品を追っていく。

「でもどうして疲れを取る料理なの？」

「いや……あくまで推測だが……ハヤテもマリアも私のせいで疲れているのではないかと心配なのだ。マリアに至っては15歳は老けて見える」

「……なんともコメントしにくい見解ね」

「ハヤテもいかに強靱な肉体を持っているとは言え……ことあるごとに不幸が襲ってきてはさすがにいかんともしがたい。そこで私はハヤテのHPを100から120に上げるような料理を作りたい」
「限界突破？つまりスタミナ料理ってこと？」

「ああ。一体どういうものが疲れを取る効果があるのだ？やっぱ甘いものか？」

「まあそうだけどさすがに料理を作るんだから……」

ヒナギクは辺りを見渡した。パツと目についたのは豚肉。

「豚肉とかいいんじゃないの？」

「そうなのか」

「クエン酸が含まれてるものは疲れが取れるわよ。酢の物とかも」
「なんだかよくわからんがヒナギクが言うなら……」

適当に豚肉をかごに放り込んでいく。節度がないのかあらゆる豚肉に手を出した。

「そんなに買ってどうするの？」

「決まっているではないか。今日はたくさん私の料理を食べに来るはずだからたくさん作らないと。そうだ。ヒナギク、お前も来い」

「え？ ナギの家に？」

「ああ。せっかく買い物にも付き合ってくれたのだ。せめてもの礼がしたい」

ナギはこれから自分で料理を作るとあってウキウキしていた。ヒナギクは少し考えたが断る理由があるわけでもないので首を縦にふった。

「わかったわ。楽しみにしてるわね」

「うむ。腹を空かせて待っているが良い。そうだ。確か酸っぱいものもいいと言ったな」

何を思ったかナギは目についた酸っぱいものをどんどんかごへと放り込んでいく。梅干し、レモン、シ〇キックス……ジャンルはまったく統一されていない。ヒナギクは呆然。

「ちょっと……何でそんなの買うのよ」

「ん？何をそんなに困った顔をしているのだ？金なら払える。心配するな」

「そうじゃなくて。どう組み合わせるつもり？それ」

「組み合わせって言われても……体に良いものはどう組み合わせても良いものではないのか？」

「違うわよ。どんなに良いものでも使い方を間違えたらとんでもな

いことになるの」

「ダイナマイトのようなものか？」

「そうね。料理はね、プラスとプラスを足してもマイナスになることがよくあるのよ。肝に命じておきなさい」

「わかった。わかったが……何かに使えないのか？」

「使えないことはないと思うけど……まあナギがそこまで言うなら買っていったら？」

「うむ。そうする」

結局無駄になるかもしれない大量の酢の物をかごに入れたままレジへと向かった。そこではぐれていたハヤテとようやく合流できた。

「おお。ハヤテ。ここにいたのか」

「はい。むやみに探してすれ違いになったらと思ってレジで待ってたんですよ。……あ、ヒナギクさんも一緒だったんですか」

「たまたま見かけたから」

「ハヤテ。お前には申し訳ないがヒナギクに手伝ってもらってもう買い物は済ませたから」

「……これを？」

ハヤテはナギが持っていたかごの中身を見て言葉が出なかった。なにせ梅干しとレモンが入り乱れているのだから。何を作るのかナギに聞こうとしたが恐ろしくなり聞くのをためらった。

「ハヤテ。会計を頼む」

「は……はい。わかりました」

「帰ったらすぐ料理を作るぞ。いやー、楽しみだな」

上機嫌のナギをよそにハヤテは苦笑いするしかなかった。ナギの聞こえないところでヒナギクにささやいた。

「あの……お譲さまは何をやるうとしてるのか聞いてませんか？」
「……疲れを取る料理って言ってたわ。私のせいかも……。酸っぱいものが体に良いって言ったから……」

あまりに極端な選択をしたものだからヒナギクも少なからず責任を感じていた。

「気にしないでください。ありがとうございます。お譲さまを手伝ってください」

「ハヤテ君……。うん。そうだ。言い忘れてたけど、私もナギのデイナーに誘われたからまた後でお屋敷にお邪魔するわね」

「本当ですか？お譲さま、すごく喜んでくれると思いますよ」

ハヤテは手を打って喜んだ。もうこうなったらナギの望みを叶えられるだけ叶えてやりたい。そう思った。ド派手な夕食にするつもりだった。

屋敷に戻ると早速調理に取りかかるのかと思えばナギはまだキッチンには立たなかった。イスに座り目をつぶっていた。

「お譲さま。もしかして早起きしたから眠くなっちゃったんですか？」

「……バカを言え。イメージトレーニングをしているのだ。頭の中で想像し本番でどんなことが起こってもうろたえないように……。それから……。ハムスター待ちだ」

「え？どうして西沢さんを待ってるんですか？」

「あの負けず嫌いのことだ。完成品だけ見ても誰か違うやつが作ったと抗議してくるかもしれん」

「それは大丈夫だと思いますよ。お譲さまの料理はお譲さましか作

れません」

解釈によっては様々な見方ができる発言である。歩が来るまでの間、しばらくナギはイスから一步も動かなかった。

ナギに頼まれ人集めに出かけたマリアは白皇学院に来ていた。卒業生ということもあり難なく敷地内に入ることができた。さっそく向かったのは宿直室。

「すみませーん。どなたかいらっしゃいますか？」

中に呼び掛けると「はい」と気の抜けた声が返ってきた。思惑が当たったマリアはすぐに中に入った。

「突然おじゃまして申し訳ありません。桂先生」

「あら。これはこれは」

寝っ転がっていたのは宿直室を仮住まいとしている雪路。視界にマリアが入るとよっこらせと体を起こした。

「どうかしましたか？いきなり宿直室なんかに来るなんて……」

「すみません。もしかしてお仕事中でしたか？」

「いいや。全然……」

雪路は笑った。マリアも暇なのはわかっていたが一応体裁で聞いておいた。

「お暇ならちょうど良かったですわ。実は桂先生にお願いが……」

「悪いけどマリアさん。私、人に貸せるお金は持ってないわ」

「いえ、大丈夫です。桂先生にお金の相談はしませんから」

「え？じゃあ一体……」

「実はですね、今夜、うちのナギがディナーパーティーを開くことになったので桂先生もぜひ来てほしいと伺ったのです」

「ディナーパーティー！？ねえマリアさん。それってあんなお酒もこんなお酒も飲み放題ってこと？」

「ま……まあ用意できるものは用意するつもりですわ」

雪路の態度の豹変にマリアは一瞬たじろぐ。もう頭の中には料理云々より高級なシャンパンや酒のことしかない。

「わかりました。マリアさん。この桂雪路、ぜひともそのドンペリパーティーに招待させていただきます」

「なんだか名称が変わってしまってますけど……。あ、ところで……今日は生徒会のお三方はいらしてないんですか？」

「あー。あの子たちなら今ごろ補習……。けど安心して。私がその分飲めや歌えや大騒ぎするから」

「そ……それはとても迷惑……。いえ、とても心強いですわ。では夕方、お待ちしていますね」

「任せといて。私、自分の利益になる約束は破ったことはないから」

雪路は終始上機嫌だった。

三千院家ではようやく夕食に向けての準備が始まろうとしていた。歩が来たのだ。玄関にはハヤテが出迎えに行った。

「いらっしやいませ、西沢さん」

「お、おはようハヤテ君。会えて嬉しいよ」

「どうぞ中へ。お譲さまが首を長くしてお待ちなので」

歩が遅れたわけではない。現にまだ4時。早すぎるとさえ思ったくらいだ。

「こんな日の出てるうちから準備するなんて……ナギちゃん、相당한気があるんじゃないかな」

「まあやる気は満ちてますよ。西沢さんに自分が料理ができることを見せつけてやるんだって」

「そうなんだ……。なんか悪いなあ。そんなに疑ったわけじゃないのに……」

「いえ。西沢さんがいてくれるとお譲さまも張り合う相手がいいことだと思います。西沢さんは弟がいるから年下の面倒見がうまいと思いますよ」

「そ……そうかなあ。そう言ってもらえて嬉しいよ」

歩は頬を赤らめた。そのまま中に通されナギの部屋に入ると待ちかねたナギがゆっくりイスから立ち上がった。

「よく来たな。てっきり尻尾を巻いて逃げ出したかと思ったぞ」

「あれ？ ハヤテ君はナギちゃん、待ちわびてるって言ってたけど……」

「うっ！ こらハヤテ！ 余計なことを言うんじゃない！」

「す、すみません」

出鼻を挫かれナギは怒った。なんとかして歩より上位に立とうと必死になる。

「では行くぞハムスター。食材は既に見つけてきてある。好きなように使うがいい」

「本当に？ ありがとうナギちゃん」

「これから戦う相手に礼を言われても……嬉しくもなんともないか

らな！」

「はいはい」

ナギはプンプン怒ってキッチンに歩を連れていく。ハヤテももちろん同行しようとしたのだがナギが大声で言った。

「こらハヤテ！お前は来るな！」

「え？なんですか？」

「当たり前だ。お前がいてはハムスターにどんな有利なアドバイスをしないとも限らないではないか」

「しませんよ。それより僕はお譲さまがちゃんと料理ができるか心配で……」

「い、いらん心配だ！お前は適当にその辺をブラブラしてこい！いいな！」

こうまで言われてはハヤテは何も言い返せない。ナギの心配をしながらもただただその背中を見送るしかなかった。

キッチンに入ったナギと歩はそれぞれ位置についた。ナギは一層気合いが入ったが歩は目の前に並べられた食材を見て唾然とした。豚肉に梅干し、レモンしか置いてない。

「あの……ナギちゃん？これしかないの？」

「文句あるのか？」

「だって……これだけじゃ何もできないよ。豚肉焼いてレモン汁かけて白米に梅干し添えるくらいしか……」

「わがままなやつだな。しょうがない。特別に冷蔵庫の中の物も使わせてやる」

言われるまま歩は大きな冷蔵庫を開けた。中にはようやくまともな野菜や調味料がたくさん入っていた。

「さすがお金持ちの冷蔵庫……。冷蔵庫だけでスーパーが開けるくらいだね」

「つまみ食いするなよ」

「し、しないよ！どんだけ私、食欲旺盛なのかな！」

「まあ料理下手なハムスターは小手先の技術に頼るがいいさ。私は素材の味をふんだんに生かした野生の料理を作るぞ」

「は？何よ、それ」

まずナギが取り出したのはかなりの大きさのナベ。ラーメン屋でスープを作るためにあるようなやつである。水を大量に入れ加熱するとあろうことか買ってきた大量の梅干し、レモンを躊躇なく中へと入れていった。

「ちよっ……ナギちゃん。それは一体……」

「驚いたか。この特別スープは梅干しとレモンからダシを取ること疲れを劇的にぶっ飛ばすエキスを抽出するのだ」

「いやいや……聞いたことないよ、そんなの」

「ふん。いつまでも先入観に囚われていては前には進めないぞ」

「うっ……すごい酸味……」

鼻につくような匂いがしてきた。明らかにレモンの香りだ。

「ダシはこれでできた。次は具材に取りかかる」

「て言うかナギちゃんは何を作ろうとしてるのかな？」

「見て分からののか？浅いなお前は」

「わかるほうがすごいと思うけど……」

「仕方ない……。だがパクるなよ」

「パクらないから……」

「豚の角煮」

「……へ？角煮？」

「ああ。だからこうして煮るためのスープを取っているのではないか」

一応手順通り豚肉を一口サイズにおろしていく。フライパンに油を敷き豚を焼いていく。その途中、何かを思い出したのか先程スーパーで買った食材が入っている袋の中を漁った。

「これがないと話にならないからな。疲れが吹き飛ぶクエン酸！投入！」

「ああ！タイム！」

「ん？なんだよハムスター。いきなり……」

歩が叫んだ時にはもう手遅れだった。クエン酸をナベに投入した瞬間ブクブクと泡立ち一気にシャボン状の泡が部屋の中に無数に立ち込めていった。ナギは驚きナベから離れた。

「な、なぜだ！クエン酸が爆発したのか！？」

「そんなわけないでしょ！ちよつと貸して！」

「ああ！何をするのだ！私のクエン酸を」

歩はナギが持っていたクエン酸を奪った。クエン酸と言っているがクエン酸ではない。歩は見るなり目を疑った。

「やっぱり……これ、クエン酸入り洗剤（キュ○ユット）だよ」

「ええ！？なんで！？クエン酸って洗剤にも入ってるのか？」

「だいたい見ればわかるでしょ……」

「洗剤だしたらマズイ！私の秘伝のスープが！」

「あ！危ないよ！」

どんどんと現れる泡の中を突き進みナギはナベの中を覗いた。だがすでに泡だらけで真っ白になってしまった。スープの面影などこれっぽっちもない。

「くそっ！クエン酸のバカーー！！」

「ちょっとナギちゃん落ち着いてー！」

その後はもう暴動であった。準備に準備を重ねてうまくいかなかった苛立ちから暴れまわりキッチンの中はほのかな洗剤の香りと泡で満ち溢れてしまった。

そんな事情を知らないハヤテは邪魔にならないよう屋敷の外の掃除をしていた。掃き掃除をしていると白皇学院から戻ってきたマリアに出会した。

「あ、おかえりなさいマリアさん」

「ナギの様子はとうですか？ハヤテ君」

「それが……邪魔だったみたいで追い出されてしまって。今ごろは西沢さんと2人でキッチンです」

「そうですか。あ、そうそう。桂先生が来てくれることになりましたので」

「本当ですか？」

ハヤテもマリアにヒナギクが来てくれることを伝えた。来客は2人。いないよりかはマシであろう。

「まああまり大人数だとそれはそれで大変ですからね。それくらいが妥当でしょう」

「ナギはハヤテ君に食べてもらうのが一番の目標でしょうから……」

「でも楽しみです。お譲さまがあんなに張り切っていたのでどんな料理になるか……」

「あまり期待はしないほうがいいですよ？まあ並の料理ができてることを信じましょうか」

「そうですね。そろそろ見に行ってみます」

「私も一緒に行きますわ」

ハヤテとマリアは多少期待しながらキッチンへと向かった……。のだがキッチンから漏れる途方もない膨大な量の泡を見た瞬間その期待も泡のように消え去った。ただただ顔を合わせるだけ。

「あの……お譲さまは何を作ろうとしてるんでしょうか？」

「さあ……？石鹸でも作ってるんじゃないですか？」

マリアはもう笑うしかなかった。ハヤテは恐る恐る中を覗いた。目に飛び込んできたのはぐちゃぐちゃとしか言いようがないキッチンだった。泡は飛び散り皿は割れ道具は床に散らばっていた。泡まみれで倒れている歩も見つけた。

「西沢さん？大丈夫……じゃないですね」

目をぐるぐるん回して気を失っている。よほど衝撃的だったのだろう。そして呆然と立ちすくんでいるナギもいた。

「ハヤテ……ふっふふ……」

「ちよっ……お譲さま？何があったんですか？」

「これのせいだ。これの……」

「え？」

ナギは例のクエン酸入り洗剤をハヤテに投げた。キャッチしたハヤテは何が起きたかだいたい察することができた。

「ハヤテ……。私の料理……。食べてくれるか？」

「え……。それは……。ちよつと食べんさん……。なんちゃって」

ハヤテの最大の気のきかせたセリフだった。一度はフツと口元で笑ったナギだがだんだんまた怒りが再発してきた。

「もう料理なんか絶対するもんかー！！」

もちろんパーティは即刻中止となったそうなの。

4章 創意創作（後書き）

お・し・ま・い

（あとがき）

途中で気が付いたのですが、タイトルの「ナギの流儀」つもりでパクリでしたね。なんか語呂がいいからつい……。まあ……。いいか

オチが弱いとは思いますがグダグダになるよりかはそのままフェードアウトのほうがいいかな、と結論付けました。個人的には満足してます。寄り道することなく手頃な長さでそれなりにまともな設定。平凡な小説にマルあげよう

惜しむらくは……相変わらずの文才のN A S A。こればかりは……どうにも鍛えられないものが……

こんな私の小説を見捨てず読んでくださった皆様に感謝、感謝です。これといって恩返しはできませんが……。お付き合いいただきありがとうございます

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0311m/>

ハヤテのごとく！～BAD ENDまっしぐら!?プロフェッショナル・ナギの流

2010年10月9日19時15分発行